

『日本語の他動性』

——意志性を中心に——

小野 良美

1. はじめに

本稿では、Hopper & Thompson (1980) や角田 (1991) らの提唱する意味的尺度の度合いの問題としての他動性 (Transitivity) のとらえ方を中心に、特に意志性 (Volitionality) が日本語の他動性にどのように影響しているかを考察してみる。

2. 度合いによる他動性

他動性 (Transitivity) という語の文字どおりの意味は、「あるものから別のものへ何かが移行する」ということであるが、言語の研究において伝統的にこの言葉は、おおむね一つの文 (sentence) 中に、その文を成立させるために不可欠な登場者がいくつあるかによって、文の種類や述語的な役割を果たす語の種類を分類する時に用いられる。すなわち英語においては、ある文 (sentence) が他動詞 (transitive verb) を含む他動文 (transitive sentence) であるか自動詞 (intransitive verb) を含む自動文 (intransitive sentence) であるかという意味において用いられるのである¹⁾。下の二つの文において、(1)は他動文 (不可欠な登場者が二つあり、直接目的語をとる他動詞を含んでいる文) であり、(2)は自動文 (登場者はひとつであり、直接目的語をとらない自動詞を含んでいる文) である²⁾。

(1) He runs a store.

(2) He runs in the morning.

伝統的な見方とは異なった他動性のとらえ方が, Hopper & Thompson (1980), Laykoff (1977), らに代表される考え方である。これは単に述語の統語的性質や直接目的語の有無, 不可欠登場者の数といった表面的な観察に終わるのでなく, いくつかの意味的, そして文法的要素によって, 他動性は度合い (degree) の問題としてとらえられ, その度合いが高ければ高いほど, 典型的な他動文である原型 (prototype) に近づき, 低いほど原型から遠ざかるというものである。Hopper & Thompson (1980) によると他動性の度合いを測る意味的, 文法的要素とは次の通りである。

(3) Hopper & Thompson (1980) の他動性の尺度

- a. PARTICIPANTS: 2つの登場者—典型的には動作者 (Agent) と受動者 (Patient)—がある方が1つの登場者の場合より他動性の度合いが高い
- b. KINESIS: 動作 (action) の方が非動作や状態 (state) よりも他動性の度合いが高い
- c. ASPECT: 完了した動作 (telic action) の方が未完了の動作 (atelic action) よりも他動性の度合いが高い
- d. PUNCTUALITY: 瞬時的な動作 (punctual action) の方が持続的な動作 (durational action) よりも他動性の度合いが高い
- e. VOLITIONALITY: 動作者の意図のある/意識的な動作 (intentional action) の方が意図のない/無意識的な動作よりも他動性が高い
- f. AFFIRMATION: 肯定的 (affirmative) な方が否定的 (negative) なよりも他動性が高い
- g. MODE: 実際に起こった事 (realis) の方が起こっていない事

(irrealis) よりも他動性が高い

- h. AGENCY: 動作者 (Agent) が明らかである方が明らかでないよりも他動性が高い
- i. AFFECTEDNESS OF OBJECT: 対象 (典型的に受動者 (Patient)) が動作によって受けた影響が大きい方が少ないよりも他動性が高い
- j. INDIVIDUATION OF OBJECT: 対象がはっきりと特定されている方があいまいなよりも他動性が高い

ある出来事 (event) は、上の10の尺度によって測られるとき、それぞれの尺度の度合いの高いものが多ければ多いほど、その出来事他動性は高く、少ないほど、他動性は低いということである。その出来事を表す文 (sentence) は、他動性が高い出来事ほど、統語的にも典型的な他動文の形をとりやすく、低いほど他動文の形から遠ざかる。例えば下の(4)は、この尺度によると非常に他動性の高い典型的な他動文である。何故なら(3)のいずれの尺度においても高い度合いをしめすからである。

(4) John smashed the cup.

- a. 登場者が2つある
- b. 動作である
- c. 完了した動作である
- d. 瞬時的な動作である
- e. 意図的な動作である
- f. 肯定 (文) である
- g. 実際に起こったことである
- h. 動作者がはっきりとしている
- i. 受動者が動作によって大きく影響されている
- j. 受動者がはっきりとしている

一方、次の(5)はいずれの尺度の度合いも低く、よって他動性の非常に低い文である。

(5) Freedom cannot be permanent.

- a. 登場者が1つである
- b. 動作はない
- c. 未完了である
- d. 持続的である
- e. 意志, 意図はない
- f. 否定的である
- g. 実際に起きている事ではない
- h. 動作者はない
- i. 受動者はない
- j. 受動者はない

あるグループの構成員がはっきりと分類されるのではなく、度合いによって測られる以上、当然のことながら度合いの高いもの、低いもの、そして中間に属するものが存在する。下の(6)は表面的には直接目的語をもつ他動文の形をしてはいるが、他動性の度合いを測ると、中間的なものと考えてよい。

(6) I like beer.

- a. 登場者は2つである (+他動)
- b. 動作はない (-他動)
- c. 未完了である (-他動)
- d. 持続的である (-他動)
- e. 意志や意図は曖昧である (中立)

-
- f. 肯定的である (+他動)
 - g. 実際にある (+他動)
 - h. 動作者はない (-他動)
 - i. 対象に影響はない (-他動)
 - j. 対象は特定されていない (-他動)

英語ではたまたま統語的に他動文の形をしているが、同じ意味を表す表現が自動文である言語は少なくない。例えばスペイン語がそうである。スペイン語の文法では下の文は自動文とみなされる。

(7) me gusta la cerveza.

私-与格 好き 冠詞 ビール

“私はビールが好きだ”

また、同じ意味を表す日本語の文は、これまでに様々な議論をひき起こしてきた。

(8) 私は ビールが 好きです。

上の文において「ビールが」は、主語なのか、目的語なのか、それとも主語でも目的語でもないのかという議論が多くの学者によってなされてきた。主語ならばこの文は自動文であり、目的語ならば他動文である。時枝(1941)は、これは主語でも目的語でもないとし、“対象語”と呼んだ。また三上(1975)はこのような日本語の性質を考えると、日本語の文法を分析するのに、「主語」という概念は用いないほうが良いと唱え、日本語研究における主語廃止論を展開した。これらの議論について、ここでは詳細に触れないが、これらの議論は、日本語においては主語や目的語を定義したり選別したりすることが非常に困難であることから派生している。

3. 主語、目的語の定義

英語において、主語や目的語という用語や概念を用いて文法を説明するのは非常に有用であり、殆ど問題は生じない。それは、これらの定義や選別が比較的明白にできるからである。主語や目的語に相当する名詞句は、文中の他の句とは、統語的に明らかに異なる機能をもっている。すなわち語順において、格の表し方や側置詞との関係において、更に主語に限っては動詞との呼応関係において、他の句には無い機能があるために、それが主語であるという選別が容易であり、従って文法の説明にも非常に有用である。

一方日本語においては、主語や目的語を定義、選別するのが非常に困難であり、これらの用語を用いて文法の説明をしようとすると、多くの問題を生ずる。語順によって主語や目的語を定義することはできず、英語の主語のように動詞と特別の呼応関係をもつ名詞句は日本語にはない。格助詞と呼ばれる側置詞によって主語、目的語を定義、選別することが試みられてきたが、これにも問題がある。このため、三上のように、主語廃止論を唱える者が出たり、柴谷(1978)のように、第2次文法範疇という操作によって主語を定義、選別する方法が考えられたりしている。

日本語において、語順が入れ代わっても意味が入れ代わらずに伝達可能なのは、側置詞(後置詞)である助詞があるからである。一般的には「が」が主語を表す主格助詞で「を」が目的語を表す対格助詞であると考えられることがあるが、後に述べるように、「が」が必ずしも主語につくとは限らないし「が」や「を」の全く現れない文もごく自然に存在する。下の(9)には「が」も「を」も現れていないが、普通の文である。

(9) 僕は りんごは 好きだ、でも なしは 嫌いだ。

もし、「が」を主語、「を」を目的語と定義づけるなら、この文には主語も目的語もない。

さて、日本語の主語や目的語、あるいは助詞のシステムについて詳しく議論することは本稿の主旨ではないので、それは避けることにするが、以下、他動性と助詞とのかかわりについて述べていく。

4. 日本語の他動性と助詞

前に、度合いの問題としてとらえる他動性の考え方について述べたが、角田 (1991) はこの考え方に即して、日本語における典型的な他動文の原型は、主語相当語句に「が」、目的語相当語句に「を」という助詞のパターンをとると述べている³⁾。同様に Sugamoto (1982) も日本語には「を」をとる目的語と「が」をとる目的語と2種類の目的語があって、他動性の高い文の目的語は「を」、低い文の目的語は「が」をとると述べている。本稿では、先に述べたように、日本語の主語や目的語の定義づけが非常に困難であることから、きちんとした定義なしにこれらの用語の使用を避け、意味的に行為の主体となる方(典型的には動作者で一般的に主語と呼ばれる方)を「主体」、行為の対象となる方(典型的には受動者で一般的に目的語と呼ばれる方)を「対象」と呼ぶことにする⁴⁾。従って、典型的な他動文では主体が「が」、対象が「を」という助詞を伴う。

5. 角田の他動性の定義

角田 (1991) は、Hopper & Thompson の他動性の尺度について触れた後、すべての言語に共通の典型的な他動文の原型を次のように定義付けている。

他動詞文の原型の意味的側面：

参加者が二人(動作者と動作の対象)またはそれ以上いる。動作者の動作が対象に及び、かつ、対象に変化を起こす。

他動詞の原型：

相手に及び、かつ、相手に変化を起こす動作を表す動詞⁹⁾。

これによると、動作が完了しているかどうか、瞬時的なものかどうか、意図的であるかどうか、などは典型的な他動詞の定義としては不要だということである。動作が対象に及び、かつ対象に変化を起こすことが重要なのだ。Hopper & Thompson らの基準の多さに比べると、非常に単純なものである。仮に Hopper & Thompson の用いた他動性の基準要素の用語を使うなら、角田が用いたのは、Participants, Kinesis, Affectedness of Object の3つのみである。

確かに、少なくとも英語と日本語に関する限り、他動性に影響を与える要素は多くないと言っていいだろう。すなわち、英語と日本語の場合、Aspect, Punctuality, Affirmation, Mode, Agency, Individuation of Object などの要素が、英語において(直接)目的語を取るか取らないか、あるいは日本語において助詞の選択に影響を与えることはないと言ってよい。ただここでとりあげたいのは、Volitionality (意志性)¹⁰⁾、すなわち、動作が意図的であるか否かの問題である。なぜなら、日本語には意志性の度合いによって他動文のパターンとそうでないパターンとにわかれる現象がみられるからである。

6. 意志性の問題

角田はこの点について、他動性の原型を定義するのに意志性は不要であると述べている⁷⁾。その根拠として、意図的にした行為が対象に影響を与え変化を起こすとは限らないし、無意識のうちになした行為が対象に影響を与え変化を起こすこともあるが、このうち他動文の形を誘発するのは殆どの場合、行為が対象に影響を与え変化を起こしたかどうかの方であって、行為が意図的であったかどうかではない。例えば英語には、意図的であるか否かは不明な文が他動文であり、明らかに意図的である同じ行為が自動文で表される例がある。

(10) a. I hit him.

b. I hit at him. (角田:83)

上の(10) a. は行為が意図的であるか否かは不明だが他動文であり, b. は明らかに「彼」を狙ったという意図が感じられるが自動文である。これは a. では「打つ」という行為が「彼」に命中している, すなわち行為が対象に影響を与えていることがわかり, b. では命中しているかどうか, 行為が対象に影響を与えているかどうかはわからないからである。従って, 他動文と自動文を分けているのは, 行為が意図的であるか否かによるのではなく, 行為が対象に及び, 影響を与えているか否かによるのだということである。

さて, 前にも述べたが, 日本語には意志性が関係して他動性に影響を与えていると思われる現象があり, 角田もこの点に言及している⁸⁾。日本語を含め世界中の多くの言語に, 2つの登場者を必要とする述語であっても, 意志性の低いもの, 例えば能力, 所有, 感情, 知識などを表す述語が, 典型的な他動文とは異なる助詞のパターンをとるが, これらの述語は, 何等かの意志性が加わる表現を伴うと, 典型的な他動文のパターンをとることがある。Kuno (1973), Jacobsen (1982), Sugamoto (1982) らは, 意味的に2つの登場者があり, 2つのうち対象である方 (典型的な他動文では「を」を伴う方) の登場者に主格助詞「が」を伴う日本語の述語として以下のものを挙げている。

(11) 対象に「が」を伴う述語:

内的感情: 好き, 嫌い, 羨ましい, 恋しい, 怖い, 悔しい, など
能力/可能性: うまい (上手だ), へた, できる, 作れる, 買える, など

願望: 見たい, したい, 着たい, 書きたい, など

意図的でない知覚: 見える, 聞こえる, わかる, など

所有: ある

必要：要る，

例えば「わかる」という述語は普通下のような助詞のパターンをとる。

(12) 私は あなたの気持ちが わかる⁹⁾。

これに典型的な他動文のパターンをあてはめると、不自然な文になる。

(13) ?私は あなたの気持ちを わかる。

ところが、これに意志性を表す表現が加わると、対象にもはや「が」は使われず、他動文パターンである「を」が伴われる。

(14) 私は あなたの気持ちを わかろうとした。

(15) *私は あなたの気持ちが わかろうとした。

しかし角田は、(14)のような文は典型的な他動文ではないので、やはり意志性は他動性の原型の定義に含める必要はないと言っている。この点についての真偽を問うために、以下、もう少し検討を加えてみようと思う。

(11)に挙げた述語の多くは、意味的に非常に近く、しかも対象に「を」を伴う述語と比較することができる。例えば、「私はビールが好きだ。」と「私はビールを好む。」という2つの文は、意味的にはほぼ等しく、対象には「が」と「を」という異なる助詞を伴っている。以下、(11)のリストの中から幾つかの述語を選んで文にし、それぞれについて、意味がほぼ等しく、対象に「を」をとる表現を文にし、それぞれのペアについて他動性の違いをみることにする。その際、角田の他動性の原型の定義にそって、2つの登場者、動作、対象への影響、対象の変化、という尺度、それにここで今問題にしている意志性という尺度を加え、度合いの高いものには

「+」、低いものには「-」、どちらも可能性のあるものには「±」で表してある。

内的感情：

(16) a. 私は にんじんが 嫌いだ。 b. 私は にんじんを 嫌う。

+ 2つの登場者

+ 2つの登場者

- 動作

- 動作

- 対象への影響

- 対象への影響

- 対象の変化

- 対象の変化

- 主体の意志

± 主体の意志

(17) a. 私は 台風が 怖い。

b. 私は 台風を 恐れる。

+ 2つの登場者

+ 2つの登場者

- 動作

- 動作

- 対象への影響

- 対象への影響

- 対象の変化

- 対象の変化

- 主体の意志

- 主体の意志

能力／可能性：

(18) a. 彼は 勉強が できる。

b. 彼は 勉強を する。

+ 2つの登場者

+ 2つの登場者

- 動作

+ 動作

- 対象への影響

- 対象への影響

- 対象の変化

- 対象の変化

- 主体の意志

+ 主体の意志

(19) a. 彼は 車が 買える。

b. 彼は 車を 買う。

+ 2つの登場者

+ 2つの登場者

- 動作

+ 動作

—対象への影響	+対象への影響
—対象の変化	—対象の変化
—主体の意志	+主体の意志

願望：

(20) a. 私は 水が 飲みたい。	b. 私は 水を 飲む。
+ 2つの登場者	+ 2つの登場者
—動作	+動作
—対象への影響	+対象への影響
—対象の変化	+対象の変化
—主体の意志	+主体の意志

(21) a. 私は 本が 読みたい。	b. 私は 本を 読む。
+ 2つの登場者	+ 2つの登場者
—動作	+動作
—対象への影響	—対象への影響
—対象の変化	—対象の変化
—主体の意志	+主体の意志

意図的でない知覚：

(22) a. 私は 音楽が 聞こえる。	b. 私は 音楽を 聞く。
+ 2つの登場者	+ 2つの登場者
—動作	+動作
—対象への影響	—対象への影響
—対象の変化	—対象の変化
—主体の意志	+主体の意志

(23) a. 私は 富士山が 見える。	b. 私は 富士山を 見る。
+ 2つの登場者	+ 2つの登場者

-動作	±動作
-対象への影響	-対象への影響
-対象の変化	-対象の変化
-主体の意志	+主体の意志

所 有：

(24) a. 彼は お金が ある。	b. 彼は お金を 持っている。
+ 2つの登場者	+ 2つの登場者
-動作	-動作
-対象への影響	-対象への影響
-対象の変化	-対象の変化
-主体の意志	-主体の意志

必 要：

(25) a. 私は お金が いる。	b. 私は お金を 必要とする。
+ 2つの登場者	+ 2つの登場者
-動作	-動作
-対象への影響	-対象への影響
-対象の変化	-対象の変化
-主体の意志	-主体の意志

以上をまとめてみると次のような結果になる。10のペアのうち、対象が「が」で表されているときは「-動作」であるのが、「を」で表されているときは「+動作」になるものは4つ、「±動作」になるものが2つ、すなわち、「動作」に違いがみられるものが計6つである。「が」のとき「-対象への影響」であるのが「を」のとき「+対象への影響」になるものが2つ、「が」と「を」で「対象の変化」に違いがみられるものは0、「が」のとき「-主体の意志」であるのが「を」のとき「+主体の意志」になるものが5つ、「±主体の意志」になるものが2つ、すなわち「主体の意志」

に変化がみられるものが7つである。これを表にしてみると下のようになる。

「が」	「を」	ペア数
－動作	＋動作	4
－動作	±動作	2
－対象への影響	＋対象への影響	2
－対象の変化	＋対象の変化	0
－主体の意志	＋主体の意志	5
－主体の意志	±主体の意志	2

ここで調べた限りでは、2つの登場者を必要とする文において、対象に「を」がつくか、「が」がつくかの違いは、対象に及ぼす影響や対象に起こる変化の度合いよりも、行為の動作性や主体の意志性の度合いによるところが大きいようである。すべての言語に共通する他動文の原型の定義ということになると別問題かもしれないが、日本語に限って言えば、他動性を考える場合、角田の言うように意志性を例外的なものとして考慮から外すのではなく、他動性の尺土に影響を与える要素として重要視してもよいのではないかと考える。

7. おわりに

Hopper & Thompsonらによって提案された他動性のとらえかたは、単なる統語的な分類にとどまらず、様々な意味的、統語的要素からなる尺度によって測られる度合いの問題としてのとらえかたである。角田は、この考え方に賛同しながらも、更にシンプルな他動性の尺度を提示した。それは、他動性は、2つの登場者、動作性、対象への影響と対象の変化によって測られれば十分であり、その他は不要であるというものである。しかしながら、日本語の他動性を考えるとき、行為が意図的であるかどうかという意志性が他動性の度合いと深くかかわっており、十分に考慮に入れるべき尺度であると思われる。

注

- 1) 正確には文 (sentence) ではなく節 (clause) と言うべきであるが、本稿においては文と節とを区別しなくても議論に支障がないため、文で統一してある。
- 2) 登場者とは人間の場合もあるし、人間以外の生物の場合もあるし、無生物の場合もあるが、便宜上、いちいちそれらを区別せず、一つ二つという数え方をする。
- 3) 角田, p.76
- 4) これは角田が便宜上「他主」や「他目」と呼んでいる(角田:29)のと同様、単なるラベル、ネーミングであってそれ以上の意味はない。
- 5) 角田, p.72
- 6) 意志性という表現は角田(角田:81-82)の訳を使わせて頂いた。
- 7) 角田, p.81-86
- 8) 角田, p.84
- 9) 本稿では、論点がここでは対象につく助詞の問題であることから、日本語としての自然さを優先して考え、主体にはすべて「は」を伴うかたちで表すことにする。すなわち、格助詞「が」を伴うであろうと思われる主体がテーマ化され、係助詞「は」を伴う場合の例文を用いる。従ってここでは「は」を伴う名詞句はすべて「が」に置き換えたものと同様とみなす。

引用文献:

- Hopper, P. and S. Thompson. (1980) "Transitivity in Grammar and Discourse." *Language*, 56. 2, 251-299
- Jacobsen, W. (1982) *Transitivity in the Japanese Verbal System*. Indiana: Indiana University Linguistics Club.
- Kuno, Susumu. (1973) *The Structure of the Japanese Language*. Mass.: The MIT Press.
- Lakoff, G. (1977) *Linguistic Gestalts*. Chicago: Chicago Linguistic Society.
- 三上 章 (1975) 『三上章論文集』東京 くろしお出版
- 柴谷方良 (1978) 『日本語の分析』東京 大修館書店
- Sugamoto, N. (1982) "Transitivity and Objecthood in Japanese." In *Syntax and Semantics* 15, ed. Hopper and Thompson. New York: Academic Press.
- 時枝誠記 (1941) 『国語学原論』東京 岩波書店
- 角田太作 (1991) 『世界の言語と日本語』東京 くろしお出版